

第6回デジタルアーカイブ学会研究大会企画セッション

シンポジウム

デジタルアーキビストの在り方

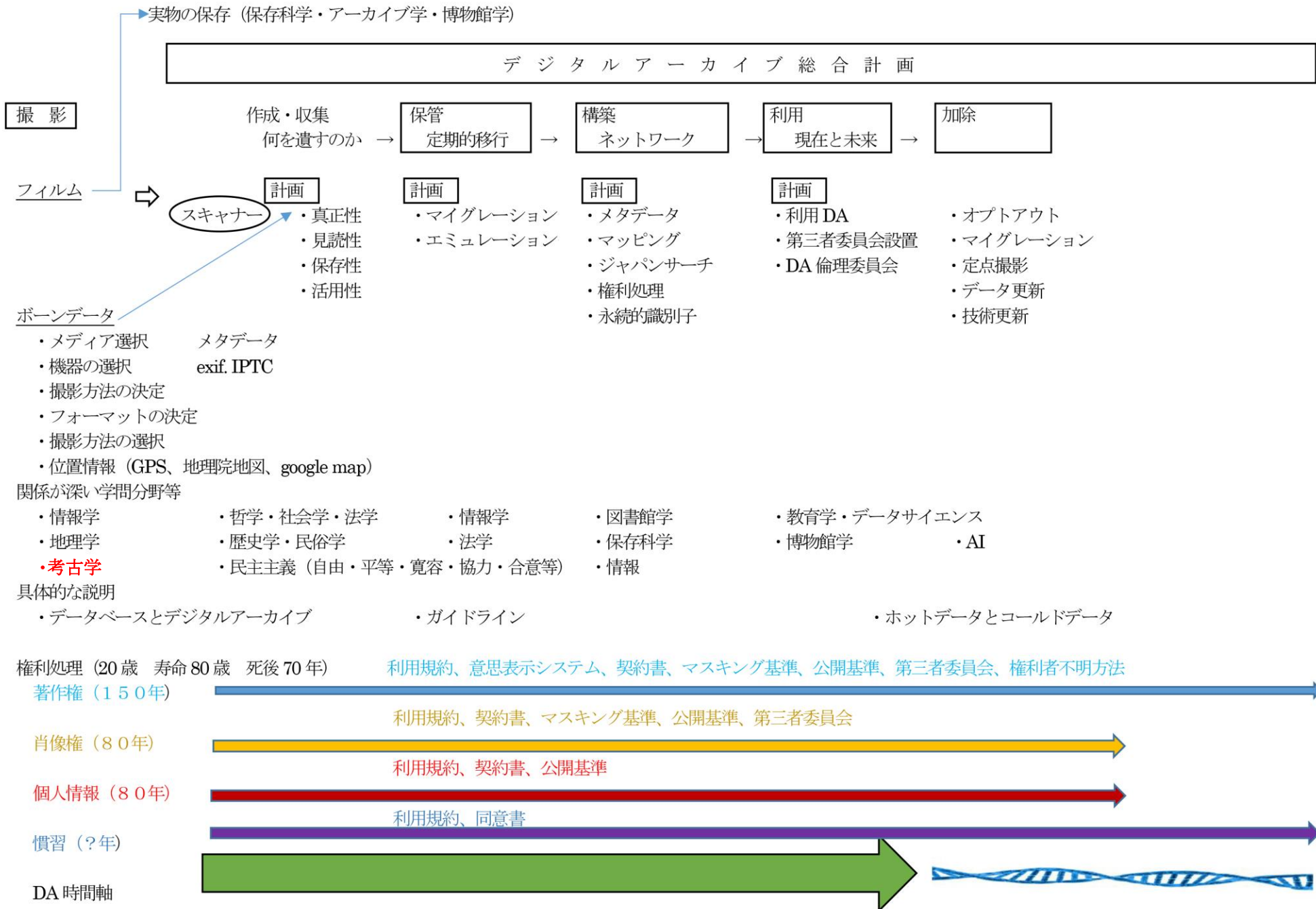
—デジタルアーカイブを企画・開発・運用する人材に求められるもの—

3次元デジタルアーカイブ時代に向けたデータ収集

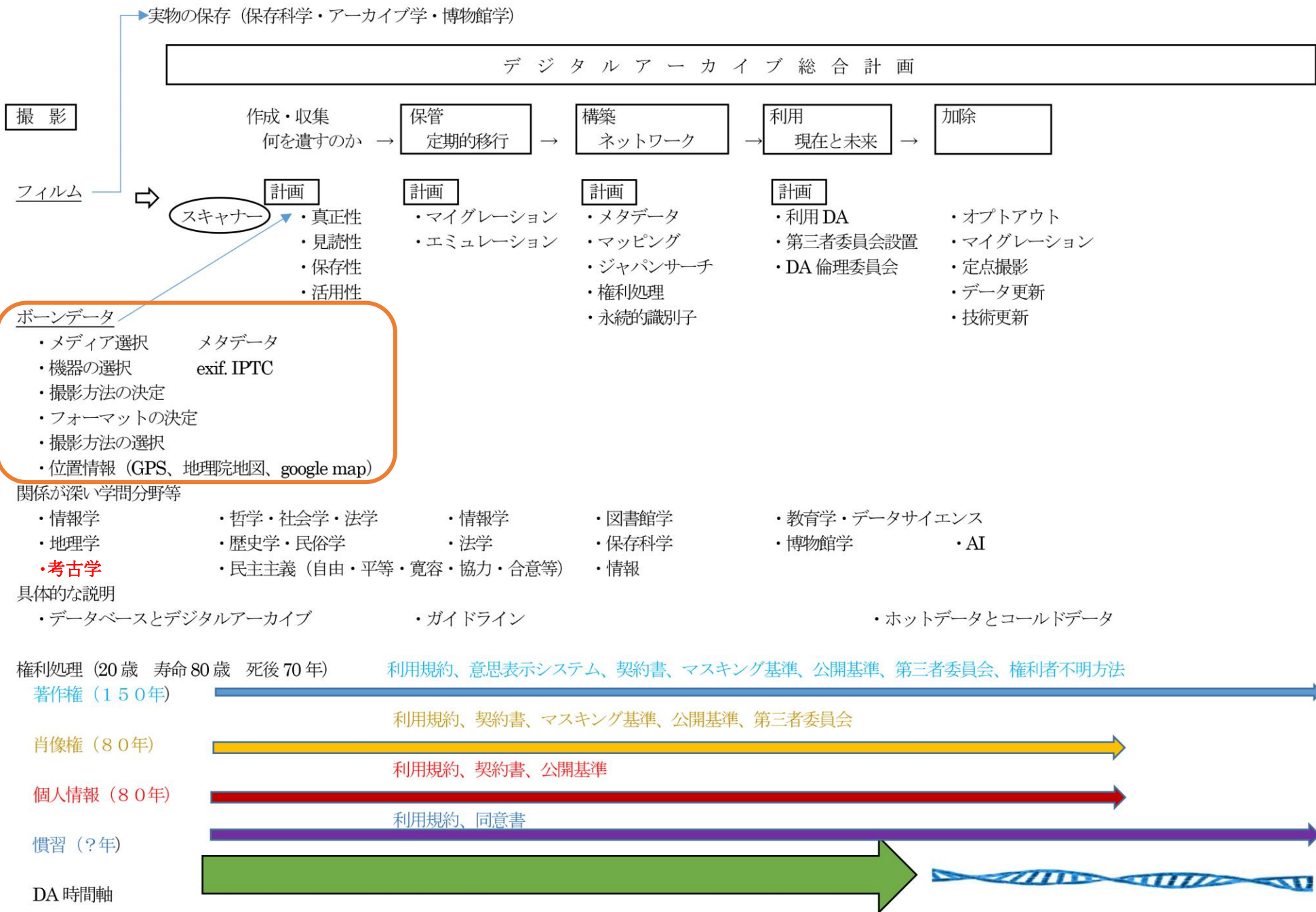
江添 誠

古代オリエント博物館共同研究員
神奈川大学国際日本学部非常勤講師

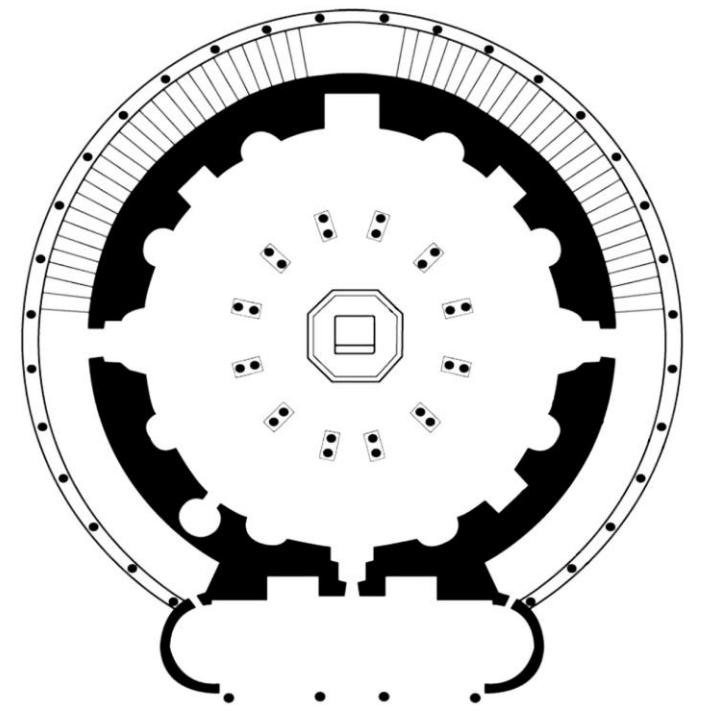
【写真の例】



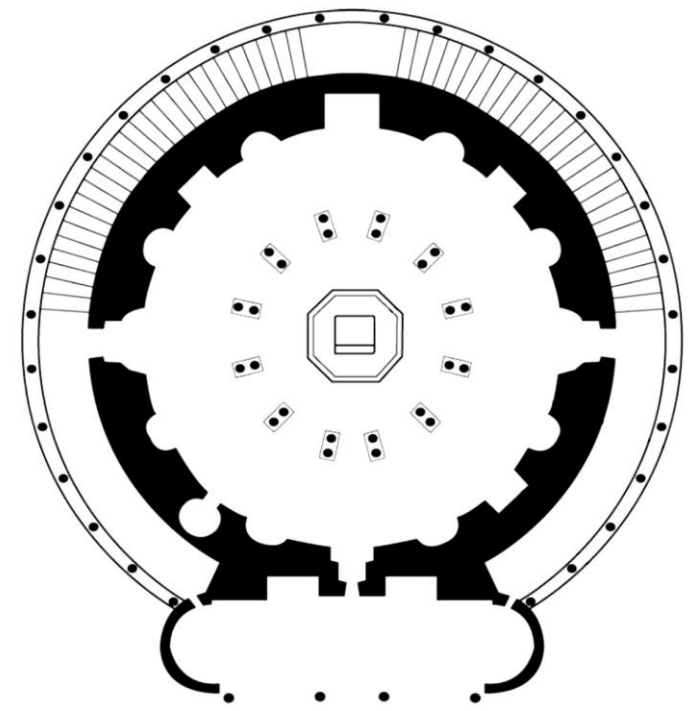
【写真の例】



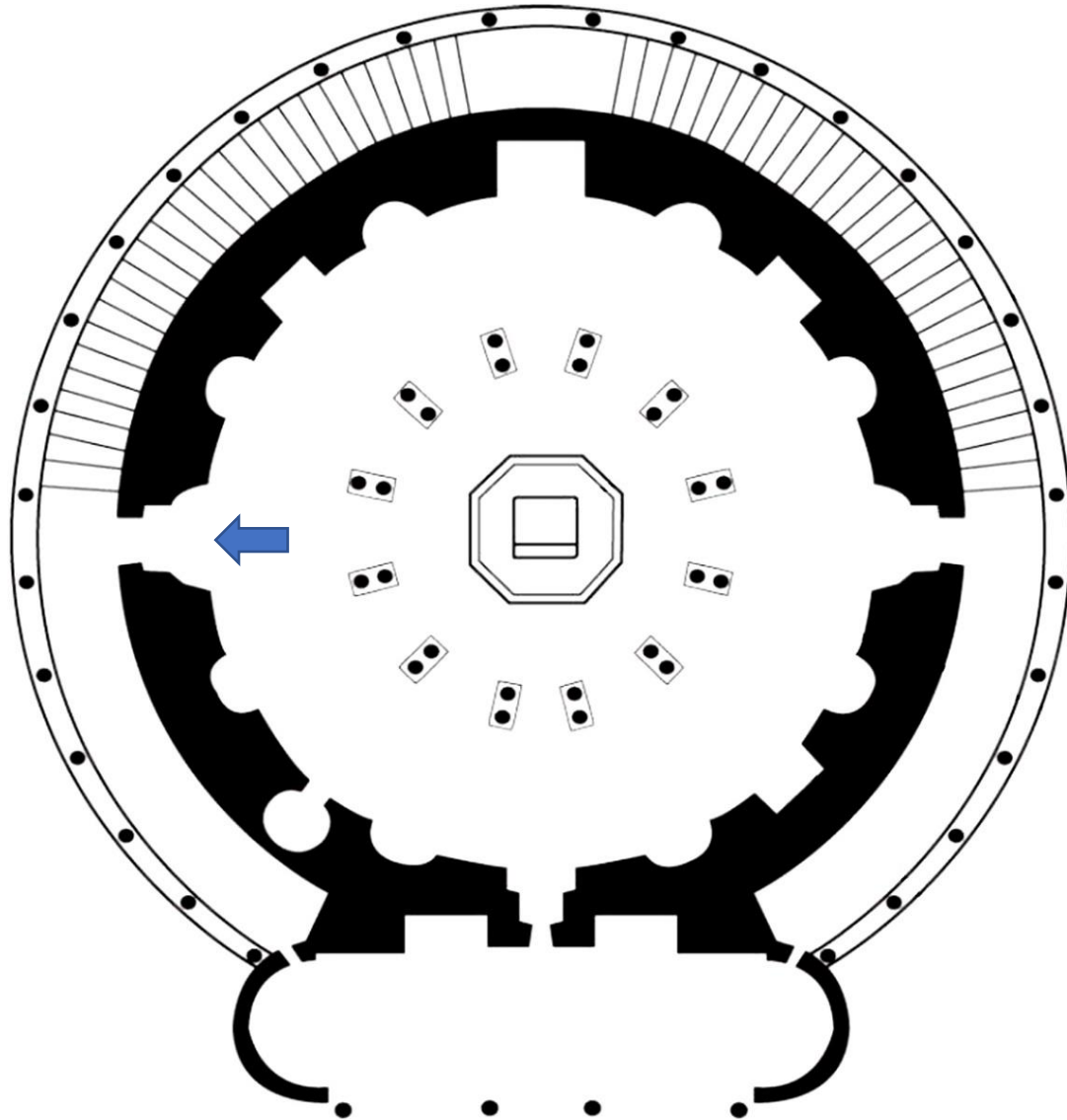
サンタ・コスタンツァ聖堂



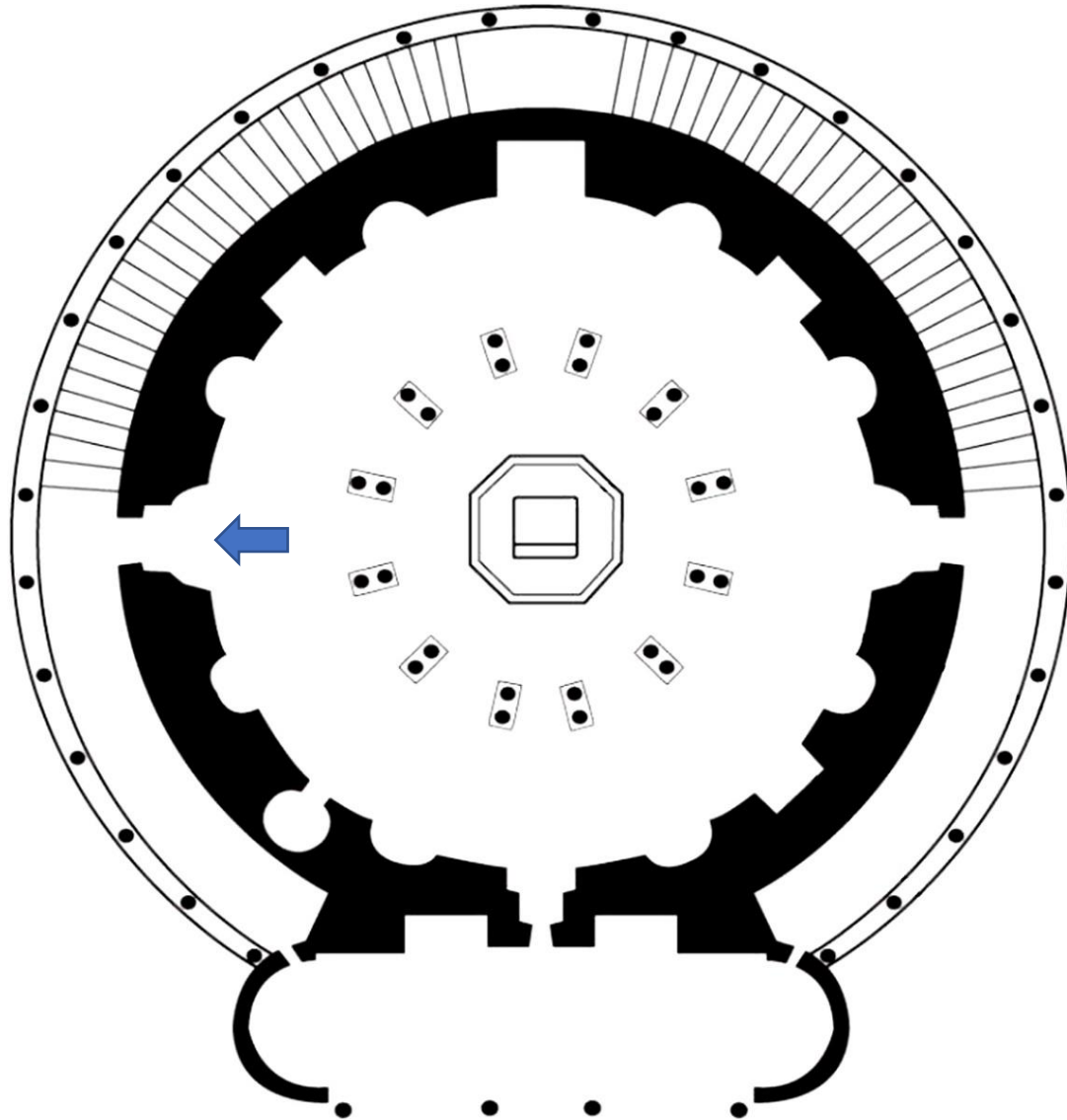
サンタ・コスタンツァ聖堂



サンタ・コスタンツァ聖堂



サンタ・コスタンツァ聖堂



イタリア ローマ サンタ・コスタンツァ聖堂のアップシス

→ 3次元データ化することで通常では可視しにくい部分が観察可能になる



イタリア ローマ サンタ・コスタンツァ聖堂のアップシス

→ 3次元データ化することで通常では可視しにくい部分が観察可能になる

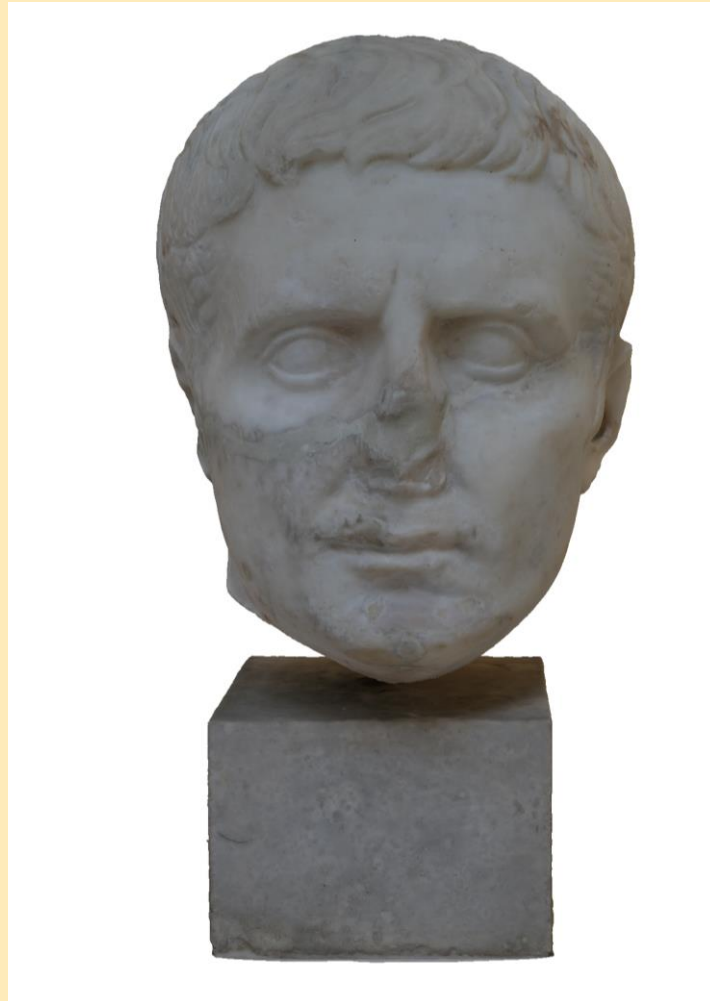


イタリア オステティア遺跡博物館 アウグストゥスの頭像

写真は撮影者の必要なデータしか写り込まない

→3次元データであれば実物と同様の観察が可能

→実物を見なければ得られない情報を可視化できる



イタリア オステティア遺跡博物館 彫像

→実物と同様の観察が可能→博物館での展示に活用



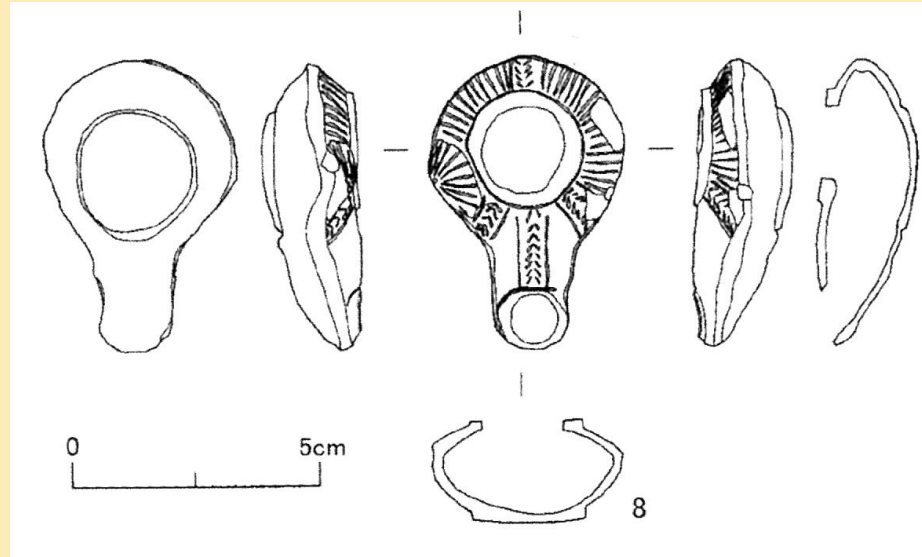
イスラエル ヒツポス遺跡 出土ランプ

→実物と同様の観察が可能→博物館での展示に活用



イスラエル ヒツポス遺跡 出土ランプ

→実物と同様の観察が可能→博物館での展示に活用



類例となるウム・カイス遺跡出土ランプ

イスラエル エン・ゲヴ遺跡 M18地区(2009年)

→図面・写真から「脳内」3次元化していたものを可視化

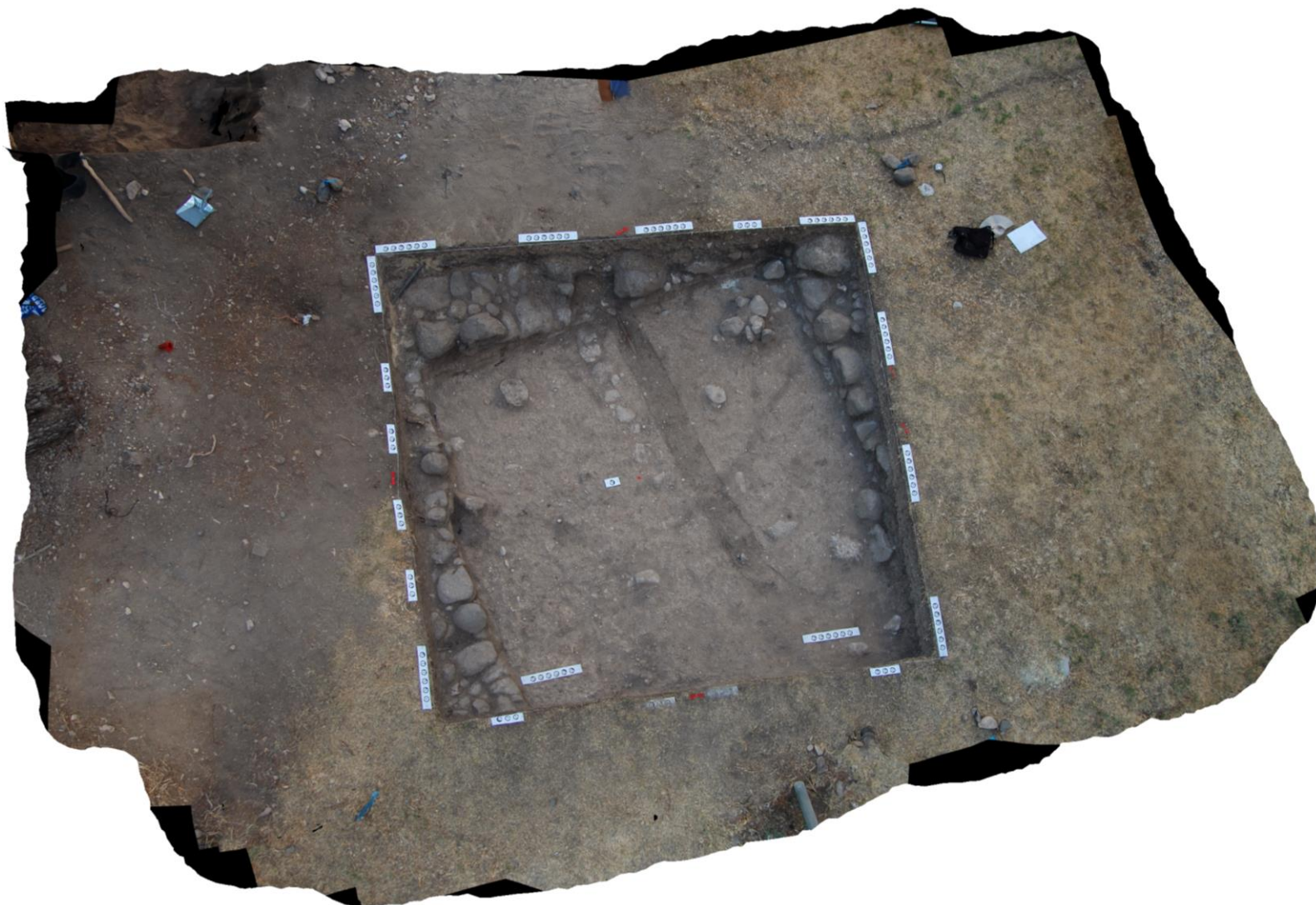


写真 3.3-7 M18 出土遺構 (南から撮影)

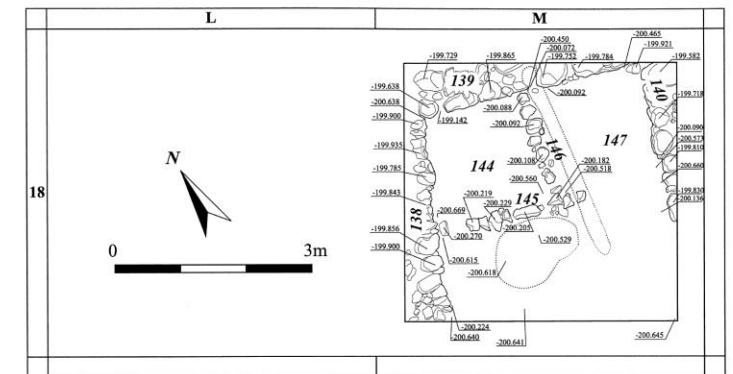


図 3.3-3 M18 出土遺構

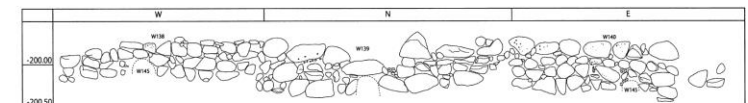
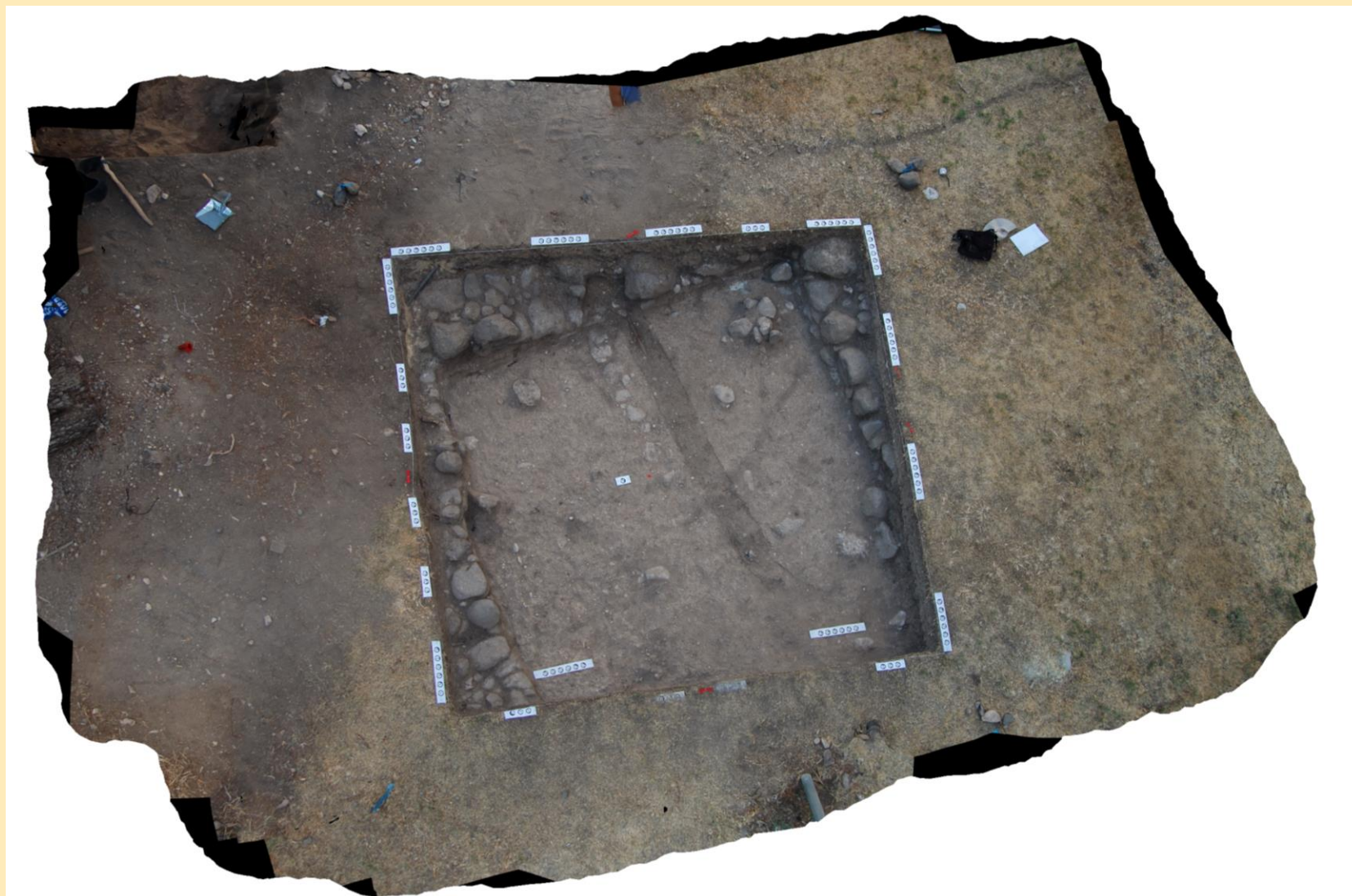


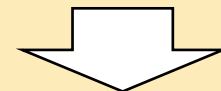
図 3.3-4 M18 W138、W139、W140 側面展開図

イスラエル エン・ゲヴ遺跡 M18地区(2009年)

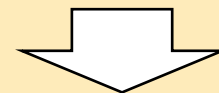
→図面・写真から「脳内」3次元化していたものを可視化



もしも日々の記録として
3次元データを
作成していたら



発掘の進展状況を
3次元で
可視化できる



発掘を他者が
再検証できる

イスラエル エン・ゲヴ遺跡 M18地区 (2009年)

→ 図面・写真から「脳内」3次元化していたものを可視化



この8方向から全体が入るように高さ1 mと3 mから撮影 (計16枚)
これぐらいの作業ならば日々できるのではないのでしょうか

ヨルダン ウム・カイス遺跡 M13/M14地区(2012年)

→図化しにくい状況をありのままに記録



3次元デジタルアーカイブ時代に対応した知識と意識を持った人材の育成

◎どのような撮影をすれば3次元モデルが生成できるかについての知識と意識

◎3次元モデルをどのようにアーカイブ化するか(プラットフォームやメタデータの付与など)、どのようにデータを活用するか(VR・MRによる表現など)に対する探究心

⇒将来の技術の進展を見越した
データの収集への意識が重要